

第68回卒業証書授与式

3月1日、西海市長 杉澤泰彦様、西海市議会副議長 田川正毅様、県議会議員 瀬川光之様を始め多数の皆様のご臨席のもと、第68回卒業証書授与式を挙行了いたしました。前日は春の嵐で天候が心配されましたが、卒業生一人ひとりに卒業証書が授与され、52名の卒業生が学舎を巣立っていきました。



杉澤市長様からのご祝辞



最後に「ありがとうございました！」



各方面から多くの祝電を頂きました。

式の後には、各クラスでLHRを行いました。それぞれが、保護者の皆様の前で3年間の高校生活を振り返りました。



卒業生代表として、西田康平君は答辞の中で、

「選挙権を手にした十八歳の私たちは、まず国や地域の未来を担う政治家の方々に希望を託す思いで、一票を投じるとともに、私たち一人ひとりがこの日本で、それぞれの地域で貢献していければと考えています。社会の厳しさを前にしても、西彼杵高等学校の卒業生としての誇りを持ち、仲間と協力することを忘れず前進していきます。」と述べました。

やわらかな春の光を浴びて瞬く角力灘には、例年になく厳しかった冬を越えた安堵と新しい季節を迎えるすがすがしさが感じられます。

本日は、私たち、第六十八回生の卒業証書授与式を挙げていただき、誠にありがとうございます。来賓の方々をはじめ、校長先生、在校生の皆様からいただいた祝福と激励の言葉を胸に刻み、私たちは希望あふれる未来へ、今飛び立とうとしています。

三年前、入学したばかりの私たちを待っていたのは、先輩方の指導によるセミナー研修でした。礼儀や挨拶、そして自主性や協調性が高校生には求められているのだと感じました。しかし研修を終え、高校生活を過ごしていく中で本当に大事な事に気づかされました。それは研修で学んだことをいかに毎日の学校生活の

中で継続し続けるかということです。研修はきっかけに過ぎず、本当に成長できるかはその後の行動次第だと分かりました。三年生になり、セミナーリーダーの立場に立った私は一年生に何を伝えるか、どう伝えれば後輩たちは成長できるだろうか、そのような事を考えながら研修に入りました。幸いに一年生が真面目に取り組んでくれたことが、リーダーに勇気を与え、自分自身をも成長させてくれたのだと思います。拙い指導でしたが、皆さんとの研修の機会をもてた事をも嬉しく思います。

さて、私たちにとって、高校生活の中心とも言えるのが部活動でした。私は弓道部に所属し、そこで何物にも代えることのできない仲間と出会いました。高総体優勝を目指し、時には仲間との意見の食い違いもありながら、日々の練習を重ねる中で、真の友情というものを知りました。三年間部活動を続けることができたのは、支えてくれる仲間が側にいてくれたからだだと思います。

思い出に残る学校行事としては、やはり三年の体育大会です。体育大会では各ブロックごとに工夫したユニークな応援合戦を作り上げました。一人ひとりが進路実現に向けて準備に追われる中、応援リーダーを中心に夏休みから振り付けを考えたり、衣装を製作したりしました。三年生が共通の理解のもと、後輩の指導にあたるために、クラス、学年の団結力はより強くなっていきました。男子のエッサッサ、女子の黒潮ソーランも三年生が一、二年生をリードして、本番では迫力ある演技を披露し、大喝采を頂くことができました。

この三年間で私が大きく成長できたきっかけとなったのは、生徒会長を務めたことです。私は自分から率先して何かに取り組むことが苦手でしたが、一年間、生徒会役員と共に多くの行事に関わり、それまでの考え方が変わりました。自分から積極的に挑戦することで達成感や充実感を知ることができ、率先して多くのことに取り組むようになりました。学

校行事に関わる中で私が特に印象に残っているのは、文化祭です。一、二年生全クラスによるクラス劇、文化部の展示・発表、三年生のバザー、有志のステージなど、この三年間で文化祭は学校全体が楽しめる素晴らしいものに進化していきました。生徒会長になり、文化祭をつくりあげる一員として活動できた事で自分に対して自信を持つことができました。そして、そのような貴重な経験をさせてくれた仲間本当に感謝をしています。二年生の時には、本校において創立七十周年記念式典が行われました。その中で文化祭実行委員は、本校創立のきっかけとなったエピソードを劇にして演じました。原爆で子どもを失った母親の平和な大瀬戸で子どもたちを育てたいという思いと、それに賛同した住民たちのボランティアの精神からこの学校がつけられたことを知り、それまで以上に学校に誇りを持つことができました。そして、その劇に携われたことは、自分自身にとっての大きな誇りでもあります。

私たち三年生にとって最後の山場は、それぞれの進路決定でした。就職では、夏休みから何度も受けた面接指導。何度も書き直した履歴書や志望理由。進学では、放課後補習、土日の模擬試験、個別指導など、合格を目指して苦しい日々連続でした。私たちが進路実現に向けて、途中で投げ出すことなく努力し続けることができたのは、支えてくれた先生方の存在があったからだと思います。本当にありがとうございました。

私たちが過ごした三年間は、西彼杵高校にとっての大きな分岐点でもありました。「学びの共同体」という新しい学習のスタイルが導入され、受身的な授業から生徒主体の授業へ変化しました。仲間と協働して答えを導き出す活動の中で、徐々にコミュニケーション能力が高まり、学校行事でも他学年と協力する活動が行いやすくなりました。これも新しい学習スタイルにより、他人を思いやる気持ちや協調性が養われた成果だと思います。また、論理コミュニケーションの授業では、インターネットを介した遠隔授業で論理的な文章の書き方を指導していただき、就職の志望理由書や進学の小論文などを書く際に役立てることができました。さらに萌タイムでは、中学校までの基本的な内容を学び直し、進学希望者は補習授業を受けることで全体の学力向上を目指しました。入学して三年間、これらの新しい取り組みに挑戦してきたことにより、社会で必要な多くのものを身につけることができました。

近年、自然災害の多い日本では、人の命が危険に脅かされる状況が頻繁に起きています。その危険に直面した時、最も必要なのが人と人との支え合いだと思います。昨年の夏も九州北部豪雨が起り、多くの人や地域に被害をもたらしました。そのような時、救いとなったのは人同士のつながりです。周りに困っている人がいたら手を差し伸べる、小さなことでも自分にできることを見つけて行動を起こす。そのような支え合いの精神を持つことがこれから先の社会で最も必要なことではないかと痛切に感じています。

さて、日本は今多くの問題を抱えています。都市部の人口集中による地域社会の衰退、少子高齢化による労働力人口の減少、緊迫する国際情勢。このような多種多様な問題に立ち向かい、解決への道を模索していかなければなりません。その第一歩として、選挙権を手にした十八歳の私たちは、まず国や地域の未来を担う政治家の方々に希望を託す思いで、一票を投じるとともに、私たち一人ひとりがこの日本で、それぞれの地域で貢献していければと考えています。社会の厳しさを前にしても、西彼杵高等学校の卒業生としての誇りを持ち、仲間と協力することを忘れず前進していきます。

これまで私たちを支えてくださった保護者の皆様、先生方、地域の皆様には、心より感謝しております。まだまだ未熟な私たちですが、今後ともどうかあたたかい目で見守り、ご指導くださいますようお願いいたします。

最後になりましたが、校長先生をはじめ、諸先生方、そして母校西彼杵高等学校の更なるご発展と、皆様方のご活躍をお祈りし、答辞といたします。

平成三十年三月一日 卒業生代表 西田康平